2012年エビ類

単位：数量，1000トン、価格，円／kg

年	数量 輸入 活	輸入 ｲｾｴﾋﾞ	輸入 冷ｴﾋﾞ	東京 生車	東京 冷輸入	家計消費 生（ｸﾞﾗﾑ）	在庫	価格 輸入 活	輸入 ｲｾｴﾋﾞ	輸入 冷ｴﾋﾞ	東京 生車	東京 冷輸入	消費支出 生（円）
23	0.4	3.9	205.6	0.4	10.9	1,918	62.9	4,402	2,071	853	4,531	1,232	3,307
24	0.1	2.8	200.9	0.4	11.9	1,935	65.7	4,509	2,121	852	4,728	1,151	3,212
%	18	73	98	104	109	101	105	102	102	100	104	93	97

輸入国（冷エビ類）　単位：1000トン

年	中国	ﾐｬﾝﾏｰ	ﾍﾞﾄﾅﾑ	ﾀｲ	ﾌｨﾘﾋﾟﾝ	ｲﾝﾄﾞﾈｼｱ	ｲﾝﾄﾞ	ｸﾞﾘｰﾝﾗﾝﾄﾞ	ｵｰｽﾄﾗﾘｱ	ｶﾅﾀﾞ	ｴｸｱﾄﾞﾙ	ﾛｼｱ	ｱﾙｾﾞﾝﾁﾝ	調整品
23	17.2	6.0	34.1	36.6	3.3	30.8	30.9	4.0	1.7	6.0	1.3	7.8	9.1	49.2
24	15.3	6.2	33.8	35.3	2.9	31.4	27.7	3.7	1.4	5.9	1.7	6.7	13.4	50.3
%	89	105	99	97	87	102	89	92	84	98	131	86	148	102

輸 入 の 動 向

24年の冷凍エビの輸入量は、20.1万トンで前年（20.6万トン）並みであった。

世界のエビ生産の60%以上を占めて、ブラックタイガー（BT）や天然ホワイトを需要面においても凌駕するようになったバナメイは、アジア地区を中心として、その生産規模の拡大もあって、その優位性が更に顕著になっている。しかし本年は、餌に使われているエトキシキン問題が発生し、バナメイ、ブラックともに、国内搬入にストップがかかるなど、若干の混乱がみられ、輸入先の変更など業界も対応に追われた1年であった。とはいうものの、末端小売りでのバナメイの扱いには大きな変化がなく、依然バナメイが主流になっている。

冷凍エビ輸入価格は、852円で前年（853円）並みで推移したが、10年連続三桁（2008年までは900円台）の価格となった。

24年の為替相場（対ドル）は、周年を通じて90円を割る超円高となったが、年末以降円安に振れた。年初から２月までは80円を割る超円高が続いた。そして、３，４月と80円台となったが、その後は再度円高に振れ6ヶ月間78，79円で推移した。しかし、総選挙前の11月頃から自民党優勢のアナウンスもあり円安に振れるようになった。そして自民党政権の誕生とともに一層円安が進み12月には84円に達した。

主要輸入国は、昨年初めてトップに立ったタイが3.5万トン（前年：3.7万トン）、次にベトナムが病気発生による減産の結果3.4万トン（前年：3.4万トン）で、続いて、インドネシア3.1万トン（前年：3.1万トン）、インドが2.8万トン（前年：3.1万トン）であった。また中国は1.5万トン（前年： 1.7万トン）と減少傾向が止まった。

また、赤エビは刺身需要も安定・定着しているが、昨年にも増して現地での好漁もあってアルゼンチン産が席巻し1.3万トン（前年：0.9万トン）と引続き数量を伸ばし、ロシアは6.7千トンで前年（7.8千トン）を下回り、カナダとグリーンランドがそれぞれ5.9千トン（前年：6千トン）、3.7千トン（前年：4千トン）とカナダ、グリーンランドとも微減となった。

また、近年製品需要の伸びも若干停滞気味になっていた調整品の輸入量は、5万トンで前年の4.9万トンを僅かながら本年も上回った。スシエビや尾付きエビ、ボイル、フライ等の衣付き関係はタイ2.7万トン（前年：2.4万トン）や、ベトナム1.2万トン（前年：1.2万トン）、インドネシア0.6万トン（前年：0.6万トン）、中国0.5万トン（前年：0.6万トン）で本年はタイのみが引続き増加傾向が顕著であった。

在　庫　量

本年の在庫量は、6.6万トンと前年（6.3万トン）を上回った。

本年は輸入量が前年をやや下回った。国内販売価格は、浜値の高値張り付きもあったものの、厳しい価格設定を余儀なくされ、総じて荷動きは低調で、在庫は増加した。

本年の冷凍エビ在庫は越年の6.8万トンのほぼ前年を上回る高水準から出発した。一昨年あたりから顕著になった在庫水準の低さが恒常的になっているが、本年は5万トン台の月がなく、各月とも6万トン台の在庫であった。したがって徐々に在庫は膨らんだが、12月の消化が好調だった結果、越年在庫は、6.7万トンとなった。

消費地入荷量と価格

24年の東京消費地における冷凍エビ類の入荷量は、1.2万トンで前年（1.1万トン）をやや上回り、依然入荷の減少傾向に歯止めがかかった。

本年の東京消費地価格は、1,151円で前年（1,232円）をやや下回ったが、バナメイの割合が庫億なっていることを反映している。

本年のエビを巡る特徴は、①本年は周年を通じて為替円高傾向（75円台まで進んだ）が昨年以上に顕著で、一定程度浜高を吸収した中での国内搬入であったこと、②アジアの産地価格は前年より下落したが養殖BTのインドネシア物（１６－２０サイズ）が15ドル/kg台に達するなど高値基調であったこと、③抗酸化剤エトキシキン問題の発生により、特にインド産の冷凍エビの搬入減少が顕著になり、インド、ベトナムからインドネシア、タイへのシフトがみられたこと、④昨年は東日本大震災による自粛ムードと価格上昇もあって、消費はやや低迷気味であったが、本年は量販店を中心に比較的順調な消化であった、⑤その結果、家計消費も数量前年並み、金額べは前年をやや下回った、⑥昨年は下半期にバナメイの大型サイズが登場したが、インドでのエトキシキン問題でBT回帰の動きもみられた、⑦アルゼンチン赤エビの販売が末端では昨年以上に目立って多くなった、⑧国内エビマーケットは、量販店を中心に安全・安心の動きが強まり、PB商品への指向が強まっている、ことなどである。